

第3章 協力欲——帰属集団を見失った時代



肉食獣であるライオンは、サバンナで生き残るために、群れを作り縄張りを持つ種として進化した。狩りをする時は、協力して獲物を襲う。(ウィキペディアより。ケニア、マサイ・マラ国立公園の7匹のライオン。The Lilac Breasted Roller 作品。)

<心の絆の希薄化—現代の問題>

増保 さて、生物には基本的に食、性、そして三つ目に危険回避欲があります。生き物は、自分の生命を脅かす諸々の危機に対処しようとします。もしこの危険回避欲を持たない生物がいたとしたら、それはこの長い進化の過程において、地球上に生き残ってこなかったであろうことは容易に想像できます。大腸菌ですら、そういう行動を示します（「第1章 食欲」の初め参照）。昔から、ヒトも、野獣から逃げ、毒草を区別して食べないようにし、病気に対しては祈ったり薬を飲んだり、さらに自然災害（台風や地震など）に対しては治水、耐震設計、予測技術を開発したり、そして最終的には対人的な危険が大きな問題として残ってきました。殺人・窃盗に対する警察機構の整備、戦争に対する国際的な話し合い（これはまだ完全に成功していませんが）などを行い、努力しています。最近では、この危険回避欲はかなり満足のいく状態に改善されたと判断できるでしょう。その意味で、この欲求については、対談もしないことにします。そして、今日のテーマとして、四つ目のヒトに特徴的な協調性（協力欲）を取り上げたいと思います。最近、隣近所の絆が失われてきています。その事例として、テレビ、新聞などのニュースでよく孤独死が報道されています。ガス、電気を止められたとかそういう形で数週間も数カ月も全然発見されないで、たまたま訪れたら死んでいた、そんな事件が何件も報告されるようになってきました。

山登 昔は隣近所の人たちがいて、隣近所同士が見張っていたのかもしれませんが、一方見守られてもいたということがあったと思います。最近はどうしてこういうふうに、隣近所の絆と言ったらいいのか——が失われるようになってきたのでしょうか。

で、もう一つ、町内会というような問題。最近ではもう町内会の集まりなんて開くことがほとんどなくなってきた。または町内会があったとしても、見向きもしないような住民がふえてきた。こんな問題もあります。

ところが一方、例えば東日本大震災が起こったときに、当然被災者の方たちは大変な思いをされていました。皆さんは協力し合って立ち向かっておられました。そして東京とか、こんな離れたところにいて被害もこうむっていない私たちでも、その東北の人たちに何かしてあげなきゃ、何か行動しなきゃ、そういう気持ちにさせられたと思います。

そうした心理の典型例として、平成13年東京山手線新大久保駅で泥酔男性がホームから線路に転落したのを見て、韓国の青年と日本のカメラマンが線路に飛び込んで助けようとした。ところが結局皆間に合わなくて、入ってきた電車にひかれて死んでしまったという事件があったと思います。

なぜその青年たちは、自分の身の危険を冒してまで助けるような気になったのでしょうか。最近では絆の希薄化という問題がありながら、それでも人々の心には、何か大変な目に遭って困った人たちを助けたいという自然の意識も働きます。この二つの落差、どのようにしてこういうことが起こるのでしょうか。なぜ命を賭けて助けたいというような気になってくるのでしょうか。

増保 まず、なぜ孤独死が起こるか、なぜ助けようとしらないのか、という問題から話を始めましょう。こうした現代の問題について話したいのですけれど、時代と場所を考慮しないとなりません。私が幼いころにはお互いに助け合って生きていましたから、孤独死なんて非常に少なかったんじゃないでしょうか。私の小さいときの町内といたら本当に、

お米が無いから隣近所の家から借りてくるとか、素行の悪い子がいると隣近所のおばさんが諭すとか。今では、そうした関係が皆無に近いです。

それは一つには、人間の絆が希薄になったからであり、金銭的にも自立ができるようになったからであり、余所の家の手伝いに関わりたくないなどが理由なのでしょう。一番の大きな要因は各家が自立して暮らせるというところにあるのではないですかね。今では関係が常に疎遠になってしまった。もう本当に見事というほどに疎遠。隣近所で名字を知らないという家が何軒もありますからね。

<囚人のジレンマというゲーム理論>

増保 お互いの信頼関係は「囚人のジレンマ」のゲームで議論されることと関係があるのかもしれない。というのは、お互いにギブ・アンド・テークしようと思ったとき、つまり協力関係を作ろうとしたときに、ギブ・アンド・テークというのは囚人のジレンマと同じように一度協力してもらったらこちらも協力するという関係があるかどうかで決まってくるわけでしょう。

山登 ちょっと違うような気がするけど、囚人のジレンマ、誘導していただいたから説明したくなってきました。ちなみに、ノーベル経済学賞も、2012年度はゲーム理論の方に授与されました。経済界でもこうしたゲーム理論が盛んに用いられるようになったのですね。さて、生物界の進化や生態にこの理論を適用した例がリチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』の12章に載っています。

要するに、遺伝子は当然自分をふやしたいという意味で利己的な遺伝子だった。で、それがふえるときのふえ方というのか、ふやし方というのか、これがそのまま囚人のジレンマのゲーム理論に従っているという説明があります。その山登なりの理解・解釈を簡単に、そして判りやすいように単純化してお話しします。

表の説明に、その囚人のジレンマのゲームのやり方を書きました(図1)。簡単に言うと“気のいい”やつ、つまり気がいい戦略の人たちを定義して、自分と同じ種の他のメンバーは助けて、みずからの犠牲において自分たちの遺伝子を次世代に伝えさせるような人たちとします。

一方、意地悪屋、または“利己主義”の人たちというのは、他人を助けるわけじゃなくて自分だけが得をするという行動をしてしまう。それで、気がいい戦略というのをドーキンスは互惠的利他主義というような言い方で定義しています。もちろんこの他にもいろいろな程度があるでしょう。

そういう意味では確かに、隣近所でお互いに助け合うということまではいかないでも、お互い利己的に振る舞わないというだけでその集団は安定に、またはさらに発展して生きていけると思えます。環境が豊かで、皆が気がいい戦略で得を出来た状況なのでしょう。

けどこのごろは、お互いが利己的に振る舞う傾向が強くなっています。きっと最近の地球資源の枯渇が感覚的に判っていて、制限環境下の数回限りの囚人のジレンマに似て、限りのある資源を他人に先んじて我先に奪い取るのが生き残るために必須だと感じて、利己的戦略を採るのです。すると、“気がいい”戦略の人も裏切られるために疑り深くなり、お互いの信頼関係を築けません。それが最近の世界の風潮なのです。社会全体がそうなっ

	協力	背信
私	報酬 (相互協力の) 2000 円	騙された損金 500 円支払い
	稼ぎ (うまく騙した) 3000 円	罰金 (相互背信の) 100 円支払い

図1. 囚人のジレンマ・ゲームでのそれぞれの結果に伴う私側から見た報酬と支払い。山登の理解しているところを単純化して、囚人のジレンマの賭博ゲームで紹介しします。胴元がいて、二人のプレイヤーに判定を下し、そのプレイヤーに利得を支払います。二人のプレイヤーは「協力」か「背信」という二枚のカードを持っていて、黙って同時に一枚ずつを出し合います。両方「協力」のときは、両方が協力するので胴元は報酬としてたくさんのお金(2000円ずつ)を渡します。両方「背信」の場合には、罰金として胴元がお金(100円ずつ)を取り上げます。片方が「協力」を出し、もう一方が「背信」を出した場合、「協力」を出した方はお人よし過ぎて騙されたとして騙された損金として500円を徴収されますが、一方「背信」で利己的な振る舞いをすると言った方は多額の報酬としてお金(3000円)を貰えます。こういうやり方で何回も同様にゲームをやっていると、当然胴元だけが損をして、二人のプレイヤーが二人とも得をするようなやり方、つまり両方とも「協力」を出すというのが最終的には一番得なことが判ってくるはずですし、お互い信頼関係を築けて、「協力」を出し続けます。実際シミュレーションしてやるとその戦略が優勢になります。生物の世界でも同様に、生態系において生存し、進化するときにも、基本的には生物がこのような「協力」(または“気がいい”)戦略で増えていくことになりま。つまり、胴元に相当する地球が、環境としては幾らでもお金を持っている、資源環境に制限がないという状況に当てはまり、プレイヤーであるいろいろな生物はお互いに協力というか、干渉しないで利己的には振る舞わないという(“気がいい”)やり方をする限り皆が得することになります。その結果、生物はいろいろな多様な生物に進化し、そして繁栄することができたのだと解釈しています。

一方、制限環境状態に当たりますが、一回とか二回とか回数が決まったような賭博ゲームをやると、当然お互いの協力の可能性は不確定であるため、疑惑を持ってしまい、「協力」というカードをなかなか出しにくくなります。すると、基本的には「背信」(“裏切り”や“利己的”戦略です)を出す傾向が強くなります。つまり利己的な人たちが多くなる傾向になります。だから制限条件下、つまり胴元が持っているお金が少ないようなときには、回数が決まったようなゲームになってしまっ、当然それぞれが自分だけが得するというやり方を皆がとるようになってしまい、“利己的戦略”が優勢となります。そんな場合には、逆に“気がいい”人たちは裏切られるわけですから、お互いを信じなくなってしまいます。

これらの振る舞い方には、この中間的なものも含めいろいろな程度のものであり得ます。実際にもいろいろな戦略が行われているようです。また、ゲームの条件、例えば報酬や罰金の額などにもいろいろな可能性があり得ます。それら条件によって結果は大きく異なります。ここでは単純化して典型的な振る舞いだけを紹介しました。

ていったらどうなるのでしょうか。

増保 囚人のジレンマの話もそうですが、基本的に二人のプレイヤーの間で、あるいはそれ以外のプレイヤーの間で、どういうプレーが行われたかということについて、情報が全く周りの人たちに伝わっていないというところにも問題があるのですよ。小さな町や村であれば、誰がどんな人間であるか情報が共有されるのですが、他人同士のような都会では全く共有されません。昔の集落においても、アンフェアな振る舞いをすると言われて罰せられるという形で、フェアさが維持されていたのです。囚人のジレンマ・ゲームでも何百回、何千回とやられるような形で続くから、それで相互の互惠性が築かれるわけです。だから都心ではこのままでいったらほんとに互惠性がなくなって、孤独死のお年寄りさらさらふえていくでしょう。孤独死だけじゃなくて、悲惨な家庭内の暴力行為も子どもたちのいじめも増えていくのではないのでしょうか。お互いに情報を共有する、そういうことをやる町内会がやっぱり必要なのですよ。

山登 小集団の中での情報の共有化は確かに重要な条件でしょう。40万年から1万年前

のホモ・サピエンスの初期状態でいえば、数十人の小集団ですね。その小集団の中で、例えば、ある人間がうそをついて食べ物を自分だけで食べちゃったなんていうことになれば、その人間は追い出されたり、あるいは次に何か食べ物を獲ったときに、その人間には渡さないでしょう。そう考えると、そういうことをやらないほうがメリットは大きかった。

増保 そういう互惠性を考えると、やはり人間は情報を共有していることも必要なのです。

<ヒトの協調性および一夫一婦型の起源>

山登 ところが、都会の人たちは、隣近所も含めてかなり薄情になってきた。だけどそれでも東日本大震災のときにはボランティア活動に行くとか、韓国の人には身を捨ててまで人を助けようとした。彼らは特別に心が温かいのかしら？違いますよね。

増保 元来、ホモ・サピエンスの心の中には、利他的行動をしたいという心があり、そこで喜びを感じるわけです。

もう 700 万年も前から我々の頭の中には組み込まれているに違いありません。進化で猿人が森から出てきた 700 万年前、ホモ・サピエンスが出現した 40 万年前あるいは行動が我々と同じようになってきた 5 万年前からお互いに助け合わなかったら自分自身が死んでしまう、そういう状況にあって、そんな協調性を持った生物種としてヒトが生まれたのでなかったら、その生物種は実は現代まで生き残ってこなかったはずです。今ヒトとして現存しているのは、ヒトがチンパンジーと異なり、そういう協調性（協力欲）を持った生物として進化したからなのです。

その由来をお話ししましょう。チンパンジーはアフリカのジャングルの中で採集生活をしていました。その当時は、結局チンパンジーが歩き回って果物とかを採集して食べて生きていける規模というのが大体 50 匹規模でした。つまりチンパンジーの集団は、50 匹規模で採集生活をして生きていた。ジャングルは安全な場所で、食物もかなり豊富にあったという意味で、それほどチンパンジーの社会の中に社会行動というのか、社会性が発展はしなかった。

ところが、気候変動のために森が狭くなり、サバンナになってきた。サバンナに当然チンパンジーも進出したのですが、勝手気ままに生きていけば、採集できる食物も少なくなったから、サバンナでは生きていけなかった。

そこに新種としての猿人が進化して生まれた。これが 600 万年ないし 700 万年前と言われてます。サバンナでは、なかなか採集だけでは生きていけない。お互いに仲間を認識できる人数が 50 人ほどですから、50 人規模の集団をつくって、サバンナで狩猟もしなければならなかった。狩猟をするために、当然人々は協力せざるを得なかった。

また、『ヒューマン（なぜヒトは人間になれたのか）』（巻末の参考資料参照）という本にも書かれていますが、サバンナで敵を見張るためにも二足歩行になって、立つ。二足歩行になったために、女性の場合、骨盤の形が変わって、産道が変化した。その結果、難産になってしまった。

加えて、ヒト胎児の脳は他のサルよりもずっと大きい。そんなわけで、我々の先祖は子供を小さく産んで大きくなるまで育てるしか仕方がなくなった。四足歩行の動物の場合に

はそのまま難なく子供が生まれたので、成体に近いような形でも子供を産むことができ、子供はすぐに立ち上がることができた。ところがヒトの場合には子供を小さく未熟なうちに産むことになったため、子供を育てる時間が長くなって、そこでもやはり同族の人たちの協力が必要になってきた。

子供を産む場合や見張りをする場合と同様、狩猟で獲物をとる場合でも、私たちのような体のホモ・サピエンスが足の速いシカや巨大なマンモスを一人では仕留められないため、やはり 50 人ほどの仲間が力を合わせて捕獲する必要があった。ここに協力欲をもつ生物としてヒトが進化したのです。おまけに、一夫一婦の型も必然的に生まれてきました。この協調性は、サバンナで群れを作って協力して狩りをするライオンと同じようなものです(本章の表紙写真参照)。ライオンもサバンナで生き残るため、協力するのです。そしてヒトは仲間に協力したと認められると嬉しいと感じる。食欲、危険回避欲、性欲の 3 つの生物本来の欲以外に、ヒトは特にこの四つ目の協力欲を持つと言えるかもしれません。(ヒトの協調性の成り立ちを図 2 に模式的に示しました。図 2 では、さらに追加して、ヒトが社会を営むことで、情報に大きく依存した形で、「情けは人のためならず」と言われるような功利的な互惠的利他主義を発達させたという見方を示しました。) 現代も同じで、災害時などにボランティアとして被災者を助けたいとボランティア活動する人たちがいますね。でも、社会状況は変化し、外敵に対する見張りは要らない、狩猟生活でもない、食べるものもたっぷりある、といった状況になっています。

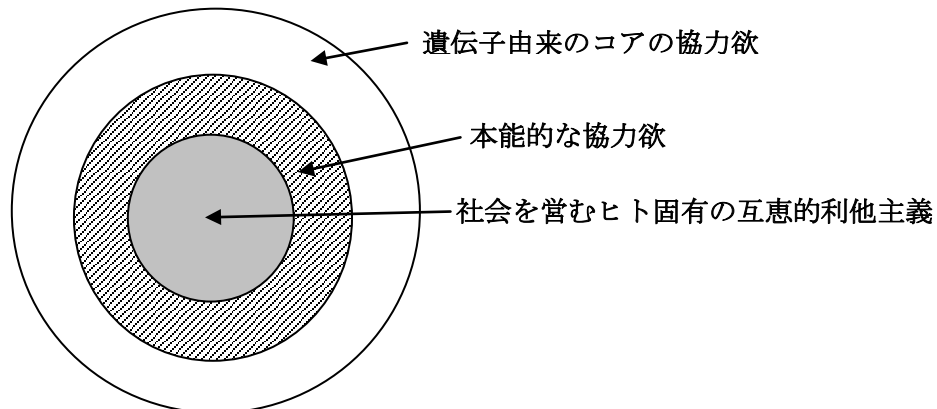


図 2. ヒトの協調性の成り立ちの模式図。コアが利己的な遺伝子に由来する部分。遺伝子は、自己を増殖させようとする。だから自己に近い親や子を守ろうとする。敵は自分の血筋を奪うもの、さらには同種の仲間を滅ぼしかねない異種生物になる。カマキリの雄は、雌が子供を生むときには自分の体を差し出して、雌の栄養となってしまう。小鳥の親は、猛禽類が子供たちのいる巣に近づこうとすれば、自分の身を差し出して戦うなり、誘導するなりして子供を守ろうとする。どんな生物も持っているはずの協調性であり、ある意味受動的な協調性と言えるかもしれない。何故なら利己的な遺伝子の増殖圧力に操られた性質と捉えられるから。だが、そのお陰でそれぞれの生物はこれまで生き残ってきたのである。次は積極的な協力欲に由来する部分。例えばライオン並みの協力である。ライオンは血族中心の群れをなし、水場近くに縄張りを作っている。この帰属集団は、上記利己的な遺伝子の行動原理/欲求に基づいて作られている。そして、サバンナで効率よく狩猟するためには、集団で協力しなければならない。つまり、本能として協調性が遺伝子に組み込まれた形でライオンという種が生まれたのである。こうした協調性を協力欲と呼びたい。ヒトもチンパンジーから進化した時、この本能的な協力欲も獲得した。大抵は血族という縄張りを持ち、敵はその同種仲間をも殲滅させようとする異種生物と、その縄張りを侵す同種集団である。ヒトの場合、明確な帰属集団があれば、血族でなくても敵は明確になっている。さらに次の部分が多分ヒト固有の文化に由来する協調性であろう。家族を持ち、社会生活を営むようになって、情報に基づいた学習により功利的な互惠的利他主義が生まれたと考えられる。ここでは情報が重要なファクターである。敵は、異種生物はもとより、互惠的でない集団、帰属集団以外の集団が敵となり得る。さらにその内にもう一層分の協調性の枠を取って当てはめようとするならば、現代社会のように、50 人を超える不特定多数社会での社会のルール、つまりは宗教や法律や罰則のような枠組みがその四層目の協調性に相当すると考えられるだろう。その枠組みは大抵が恣意的であり、かつ生物の論理とは矛盾するようなものが多々ある状況であろう。人々は、この社会のルールと個々人の協力欲との齟齬に苦しむことになった。

山登 はい。おまけに、子供を育てる場合は人手がかかりますが、それでも最近では社会が育てるべきであり、家族ではないという考え方も少し出てきていて、本当に家族としての一夫一婦型が守られるべきなのか、守ることができるのか、非常に疑問だと思います。その意味で、協調性も個体の生存に必須のものではなくなりつつあります。それはそれで幸せなことだと思います。そして、当然私としては、協調性も一夫一婦型も守り続けて欲しいと願いますが、昔ヒトが進化して誕生した頃いろいろあった制限はなくなってきつつあるというので、すごく紛らわしいというのか、嫌らしい問題になりつつあると思います。

増保 だからヒトが進化して誕生した頃は、協力欲のある生物としての具体的な形が、一夫一婦であり、家族の形成だったのでしょう。ところが今の世の中は、家族を形成するうえで一夫一婦でないと困るような条件ではなくなってきたのかもしれない。ですから、一夫一婦でなくなる可能性はあるかもしれない。そうなる、家族として夫婦と子どもたちが一緒に暮らしていく必要性もなくなってしまうのだろうか。おまけに協調性なるものも死語となってしまうのだろうか。

山登 家族である必要はないのですが、その家族にはまた別の意味で重要なポイントがあります。遺伝子が同じだということところが、やはり重要だと思います。ドーキンスの『利己的な遺伝子』にあるように、遺伝子が近い人間に親近感を持ちます。自分もやはり自分の親と子供にはすごく親近感を持つ。そういう意味では家族というのが、一つの重要なコアだと思います。だからヒトの協調性とは別のレベルの、利己的な遺伝子という意味でも家族というのが重要だとは思っています。

増保 そう考えると、最小単位の集団として家族を形成するのに最も自然なのは、性的につながった一夫一婦型に根本はあるということになりますね。昔は家族が基本単位だったので、数十人の集団が飢饉ということになれば、ほかの数十人の集団に頼るという関係が無ければ種として生き残れなかったわけで、そういう一般的な共感とか協調性はもう人間の頭の中に本能のような形で回路としてでき上がっていたに違いありません。だからヒトという種である限り、協力欲は本性として持ち続けているはずで、協力欲があるから、東日本大震災のような危機的状況を知ると、助けたいという気持ちが生じるのです。ところが現代社会では、自由競争下の利己的な振る舞いが増えたため、人々はお互いに疎遠になり、心の壁を高くして、心の絆がなくなることが増えているのでしょう。おまけに科学技術の進歩と大きな政府という考え方によって、お互いを認識できる範囲の50人規模の小集団で協力しなければ生きていけない環境・制限もほとんどなくなってしまったのですからね。子育ても何も不特定多数の社会に任せて楽になり、情報の共有などほとんど不可能になり、その上お互い利己的に振る舞うため警戒心だけが高まり、現代の病理ともいべき心の絆の崩壊に繋がっているのでしょう。

<豊かになったために消滅した協調性の必然性、制限環境下競争社会で強くなる協調性に対する阻害要因>

山登 それでは、本当に将来どうするべきでしょうか。つまり本来、ホモ・サピエンスはお互い共感を持ち、協力したいという本性を持っているのに、都会では薄情になる方向に人々が変化していつてしまっている。では情報が少ないから都会では薄情になるのでし

ようか。それだったら、情報をわっと皆に共有させればましになるのかしら。

増保 そうですね。日本では全国共通の一般新聞とテレビ放送がありますし、そうしたマスコミが多くの情報を提供してきましたから、東日本大震災の時など、ボランティア活動も活発だったのではないのでしょうか。

山登 ヒトの利他的行為を考えると、チンパンジーとか他の動物と違う点は、血縁者以外に対しても同様に働くというところにありますね。例えば、電車で轢かれそうになった人を救出しようとした一件を例として挙げたでしょう。

増保 一般的には、血縁者に対する利他的行為のほうが強いでしょうが。

山登 そうですね。そのことに関してちょっと付け足したいのですが、当然ホモ・サピエンスが誕生した頃は、30人か50人規模の集団だった。だから帰属意識も強く、その集団以外の集団や害を及ぼすような猛獣に対して強い敵対意識を持ったのだと思います。その意味では、協力欲の発露の対象として強い帰属意識を持つ集団（起源は50人規模）がまずあったのでしょう。そしてその意味で、その集団に貢献できたという幸せ感を味わうことができたのです。

昔は50人規模の小さな集団、ちょっと歴史が発展すると村になって、200人規模。さらに大きくなって、豪族なり、藩、そして日本国。戦前は愛国心と言われ、日本国のために戦争をした。敵国人を鬼畜米英というような言葉を使って愛国心をあおった。日本国民という帰属集団を意識させるために、強烈な敵対意識をつくったのでしょう。で、最近では教育の成果やグローバル化の結果、ヒトは皆同じヒトだという意識を皆が持つようになってきたのです。だから他人でも同じ仲間なのだから助けたい、そういう気持ちが出てきたのだと思います。ただ、逆に、強い帰属意識を持てる集団が曖昧になってしまったとも言えるでしょう。また、当然個々人が一人でも生きていける程豊かになったことも重要な要因です。帰属集団に依存しないでも生きていけるのですから。この点は、現代の幸せな一面ですね。

増保 山登さんの意見はポジティブですけど、私は反面、違う側面もあると思う。それは日本が一つの島国で、まとまりのよい集団だったからですよ。だから、そのまとまりで外国に対して鬼畜米英という形で動けた。ところが、今はいくらでも簡単に欧米にも行けるし、物は欧米から入ってくるし、インターネットの発達で世界中の人とコミュニケーションもとれるし、島国という枠がなくなってしまったのです。こうして、個々人の間の心の隔たりの方は大きくなってきているのです。ですから逆に言うと、いま日本人の、都会では特にそうですが、一人ひとりの隔壁が高くなってしまっている。だから良い方向と悪い方向に行く両方のベクトルがある。どういうふうにしたらベクトルを良いほうに向けられるかが重要な点だと思います。

山登 グローバル化で、確かに人は皆一緒という意識が普及しました。そうすると、広がる方向にはバリアが低くなったかもしれない。だけど、おっしゃるように、以前四人のジレンマのところでお話ししましたが、制限環境下の自由競争社会のせいで、お互い利己的になり、たびたび裏切られるために“気がいい”人たちも隣組も含めて個々人が自分の箱の中に閉じ籠ったというか、お互いのバリアを高くしてしまいました。

増保 実際、各家の間でも隔壁が高いし、一軒の家の中でも親、子供、それぞれが一つの部屋を持ってバリアをつくっているという傾向がありますよね。ですから、それで何か

つながっているとすれば、それは携帯電話でつながっていると、とんでもない形でつながっているんじゃないですか。

山登 グローバル化で、本当は人は皆仲間だよという気持ちになったはずなのに、逆に個々人にとってみれば、皆敵だよという気になってくるのは何故でしょうか。どうやったらそれをなくせますかね。あまりにもヒトの仲間がふえ過ぎた上に、敵がいなくなったからでしょうか。

増保 簡単に言えば、向かうべき敵がいれば結束できるのですよ。その向かうべき敵がいなくなれば、つまり、地球全体として生きていくということになると、見えなくなってしまいます。何故かというと、ヒトの認識範囲はやはり 50 人規模であり、その範囲で情報も共有できるのであり、人は皆同じ仲間なのだという現代知識に基づくグローバルな意識にはなかなか対応できないという点が本質的な問題なのでしょうね。これは大きな問題ですよ。おまけに今や地球資源環境が厳しい制限状況下で、しかも自由競争社会。そのため、“利己的戦略”が大手を振ってまかり通り、裏切られた“気がいい”人達は疑り深くなって心のバリアを高くする。お互い孤立し、孤独になり、本性としての協力欲と大きな齟齬を来し、心のバランスを崩して不安になっているのだと思いますよ。この問題は、「第 8 章 人々の不満と不安」で詳しく対談したいですね。

<将来像>

増保 これまでの対談をまとめてみます。教育やグローバル化の普及の結果、人類全体がヒトとしては仲間であるという認識の下、人々は協力したい・貢献したいと願いながら、この制限環境下に利己的戦略を採らざるを得ない人々や社会組織に遭遇して、仲間に貢献できると確信できる帰属集団が見当たらず、協力すべき目標も見えなくなっています。個々人は、心の中の葛藤、矛盾、齟齬に大きなストレスを覚え、心がズタズタになっているのかもしれない。だから逆に、孤独死どころか、いじめ、虐待、秋葉原無差別殺人などを起こしてしまうのでしょう。この点については、今後「第 5 章 階層化」、「第 6 章 貨幣の功罪」、そして「第 7 章 グローバリゼーション」の話の後、再度「第 8 章 人々の不満と不安」の項で論じたいと思います。そこで私達が提案しているのは、自由競争活動をいくらか制限するために、社会組織体制として全地球規模での各自給自足圏の確立です。すると 50 人規模集団という訳にはいかないまでも、現在枯渇しつつある地球環境制限下でも情報を共有して“利己的戦略”を抑え、“気がいい戦略”を採って協力欲を満たしながら、人々が心の絆を取り戻して幸せを感じることが出来る世の中になるかもしれません。それが解決策になるのかどうか、皆様もご一緒にお考えいただきたいと存じます。

第4章 家族の絆——人々は昔のような温かい一家団らんを取り戻せるのか



カルガモの親子。親は子を見守り、子は親に従い・・・。

<家族に関わる現代の問題>

増保 家族の絆はどこから生まれるのか。一夫一婦制は今後、どこまで続き得るのか。こう問われて、いま即感じるのは何ですか。何か一言挙げろと言われれば、私個人は「子はかすがいなり」という言葉につながります。最近、家族の絆の崩壊や一夫一婦制の危機が指摘されるようになってきました。核家族化が進み、4、50年前までは二世帯（親子）同居は当たり前、三世帯も四世帯も一緒に暮らし、お年寄りを尊敬するということが社会の規範だったのに、昨今では夫婦だけだったり、子供がいても子供の虐待、親殺し・子殺し、さらには老人の孤独死などのニュースが後を絶ちません。また一方では、夫婦であっても婚外子やシングルマザーが増加しています。その意味で、家族の絆が弱くなっているようです。昔は、「子はかすがいなり」の言葉どおり、両親が子供を育てていく形で結びついていたわけですが、今日ではどうなっているのでしょうか。

山登 私は、ヒトの本性という観点から発想するのですが、ドーキンスの『利己的な遺伝子』によると、まず自分の遺伝子を一番大事にするということです。子供が自分の遺伝子を一番多く受け継いでいるわけですから、自分の子供を最も大事にする。孫が、自分の遺伝子の2分の1の2分の1を受け継いでいる。孫も大事だという意味で、それぞれが家族を当然大事にして、自分の遺伝子を広げようとします。その努力が家族を大事にする、家族の絆になっているのです。夫にとって妻、妻にとって夫、つまり配偶者がいなければ自分の子供ができないという意味では家族で一番大事なのですが、配偶者が死んで悲しむかもしれないけれど、子供が死んだときの痛みほどはダメージを受けないかもしれない。

増保 身内に対する自分の親近感とか、大切にしたいという気持ちは、遺伝子の何%を共有しているかということからすべて決まる。理性的判断さえも伴わない。自ずとそう感じてしまうわけですね。

山登 ドーキンスの本を読んでいると、そういうふうな形で書いていますし、もっともだと思います。けれど、生命体としての家族の絆は、本来そういう形で持っていたはずですが、でも、日本の現代社会では、それが崩壊しつつあるというのは何故ですかね。親が子供を殺す、子供をあんまり看ない。ほっとき放しにする。

また、よく新聞報道にあるように、家族からも見放された孤独死とかありますね。社会からも見捨てられた孤独死というのは、おじいさん、おばあさんから孫までつながっている血筋がいれば見捨てられることはないはずなのですが、このごろは厳しいですね。

増保 最近若い人たちが結婚しないとか、子供は要らないとか、家族を持たないとか、いろんな人たちがいるようです。それぞれ多様化するというのはそれでもいいと言われる方もあると思いますが、基本的に生物というのは、生殖行為をするだけじゃなくて、その結果として生まれてきた子供を大切に育てていくことに生きていく喜びを感じ、家族を形成してその中で幸せを求めていくことが基本だと一般に信じられてきました。ですから今後将来にわたって、社会体制が変わってもやはり家族は必要だろう、あるいは家族における幸せというのは求められるだろうと予測しているのです。ところが、それを見えないようにしているのが社会的なあるいは文化的な影響だと思います。このままでは、社会のためにもよくないし、各人の幸せ感においても満足できないのではないかしら。

山登 本来人間は、生命体としてはやはり血が一番濃い絆だと切実に感じるはずなので

す。だけど近年では、インターネットとか、テレビとか、不特定多数の他人とか、そういう情報がどうして頭の中に入り込みやすいのでしょうか。逆に、家族に対する情報のインプット量が少ない。

増保 それとは別に、小さい赤ん坊のときに何かの理由で里子または養子として預けられた子供でも、本当は他人だということが本人に知らされないでずっと育ててきた場合は、やはりその子は血のつながりがない親に対して、産んでくれた親と同じぐらい深いつながりを持つと思うのです。

ドーキンスに従えば、血縁を認識してなくても、実はその子の遺伝子が、利己的な遺伝子としてその本体に呼びかけるはずでしょ。それなのに、なぜ育ててくれた親に対する絆が生まれるのかと考えると、やはり生活のありようによるし、血がそこまで濃いのかなという疑問が起こらないでもないですよ。

山登 この頃では、子供を育てるのは社会の責任であるという言い方もされていますね。すると、その方向になっていくのでしょうか。そうしたら、保育園や、里子みたいな形で、自分の血筋じゃないけれども、社会の一員として責任上子供を育てていくことになりませんか。

増保 イスラエルのキブツでは、そういう形で育てているのではないですか。子供たちを100人とか1000人集めて一緒に暮らせる。それが果たして子供の感情とか親子の絆にどんな影響を与えるのか。そこまで極端でなくても、最近の日本でも、社会の育児システムがかなり充実してきました。保育園とか託児所がある。そのせいで、女性たちが育児にかかりきりになる自己犠牲的な我慢強さを発揮できなくなっているとも言えるのではないのでしょうか。政治あるいは社会が、託児所に預けて働けば女性は幸せになる、という考え方をこれまで啓蒙し過ぎているのではないか。経済的に豊かになってきたということが理由ですよ。貧しければ、生きるためにお互いに一生懸命助け合って絆が生まれるんです。お兄さんが働いて弟の学費を出してやるとか。ところが経済的に豊かになって、さらに世界中の情報、そして往来が多くなればなるほど、個人主義というか、自分の利害ばかりで生きていくという生き方になりやすくなってしまいます。これは、どこかでもう一度基本に立ち返って、立て直さないといけない問題だと思います。

<家族と一夫一婦の起源>

増保 さて、家族の絆の基盤は一夫一婦型だったはずですよ。その一夫一婦のあり方も、最近危うくなってきました。いつまで維持できるのでしょうか。一夫一婦で、パートナーの子供という点にこだわるのであれば、養子は考えにくいですが、すぐれた子孫という点を最優先にすれば、よその男性の遺伝子のほうがすばらしいということになりかねない(笑)。

山登 「第3章 協力欲」でその起源を議論しましたが、一夫一婦のあり方は、確かに今の社会から見たらそれほど必要じゃないかもしれない。だけど、やはり一夫一婦って、ホモ・サピエンスとしての根源じゃないんですか。これが消えますか、ほんとに。

増保 ホモ・サピエンスとしての根源というけれども、一夫一婦のあり方がなぜあるかという(「第3章 協力欲」参照)、女性が子供を育てるためには、どうしても一人の男性

を選ぶしかない。一人を選んで、5年なり10年なり、自分と子供の食物を供給してくれて、捕食者に襲われないように守ってくれる、そういう人物がいないと困る。男性のほうも決めたパートナーに必ず自分の子孫を残してほしい。だから、一夫一婦になったわけですね。今この地球の人間社会では、捕食者の脅威とか、あるいは食べていくために困るというような問題がなくなった、先進欧米諸国ではですね。そうすると、一夫一婦でなければならない必然性があるのでしょうか。

山登 ドーキンスの言う“利己的な遺伝子”に従って、血縁が近いということで家族が基本単位の集団を形成していた。今の世の中では狩猟も必要なく、女性も社会進出して一人でも生活できるし、一夫一婦なんてほんとに関係なくなります。おっしゃるように社会状況としては、一夫一婦型なんて必要なくなってきた。男女共に行動の自由度が大きく増大しました。

ただ、一夫一婦でなくなったとき、私が恐れるのは、ヒトのあり様を支えるためにすり込まれていた本能とか考え方とかホルモンの作用とかとは相容れないことも起こるわけで、自分が人間である、ヒトらしいという気がしなくなるのではないか。不安になる、混乱を起こすのではないのでしょうか。だから、ヒトが、今の世の中で一夫一婦型の必要がなくなっても、ヒトの遺伝子に変異して新たに進化した人種にでもならない限り、不安になっていたたまれないと心配しますが。

増保 人間が生命科学を使って、生物学的に自分の生涯さえ変えかねないという状況が起きてきたのは、長く見積もっても、この100年ですね。これからの100年で重大な突然変異なんて起こりませんかでしょうし、1000年でも起こりませんかでしょう。物の考え方は変わるとは思いますがね。但し、一夫一婦になってきたのが、ニコラス・ウェイド著『5万年前』(2007刊行)によると、170万年前頃のホモ・ハビリスの時代ようです。すると、一夫一婦も実は、50人規模のヒトの集団が協調性を維持し、社会生活を効率よく営むための文化(ドーキンスの言うミーム)として生じてきた行動様式かもしれません。

山登 そうなのですか。それこそ文化・文明を、ドーキンスは“ミーム”といいましたっけ。要するに、後天的なラマルクの(ラマルクは、用不用説として、進化は後天的に獲得した形質が次代にも遺伝して起こると唱えた)な進化は起こると思いますよ。で、一夫一婦も家族という形態も、実はヒトの誕生後の、後天的なミームに属するものなのではないでしょうか。すると、時代(文化)に応じて変化してもいいのかもしれないですね。ずっと、ヒト誕生以来、持って生まれた本性(や本能)に近い行動様式だと思っていたので、最近の風潮は人々を不安に陥れるものだと憂えていたのですよ。

増保 先の章で論じたように、協調性(協力欲)が無ければ、サバンナで生き残れなかった。進化上ヒトが種として確立できたという意味で、協調性はヒトの本性だったと話しました。だから、ヒトが幸せを感じるためには、その協力欲を満たすことが必要なのだと思います。しかも認識能力が50人規模でしかないため、やはり50人規模の帰属集団は最低限必須なはずで。そして、その協調する集団が、初めは血縁中心の集団しか選択肢が無かったという理由で、当時の社会のあり様の文化として一夫一婦や家族という集団の形態が生じたと解釈すべきかもしれませんね。だから、一夫一婦や家族の形も、時代により文化の変化により、変化していくのかもしれない。

<一夫一婦、親子、家族のあり方とヒトの幸せについての現代の問題と分析>

増保 この数十年の間でも、若い人たちが30歳になっても結婚しないとか、子どもは要らないとか、そういう人たちが増えていますね。彼らが不幸かといったら、必ずしも不幸とは言いきれない。これは、ゲノムの問題じゃなくて文化（ミーム）の問題ですね。そんな文化が拡大していくと、ほんとに何か大きな社会的変化が起こってくるのではないかと。例えば、生物学的にホモ・サピエンスの女性が生理（月経）をなくしてしまう、そんなことは短期間には起こらない。自然の進化であれば、10万年以上かかるかもしれない。おいそれと起こりがたいけれど、今日の生物学的な形態と機能のまま、社会が変わり、人間の考え方が変わった結果として、家族の絆が崩壊するということはあるのではないかと。でも、家族の絆が崩壊したときには、それに代わる何らかの絆があればいいのか。宗教的な絆、あるいは社会的な絆などがあればいいのか。いや、やはり、根本は家族の絆が基盤になっていないといけなのではないのか。つまり、一夫一婦型でなくなっても、家族の絆に相当する人間の結びつきが存在すれば、不安を感じないで存続できるのではないかと。ここは重大な問題ですが、予測がつきがたい。自分の仕事は自分のためにと考えて、結婚しないで、独りでずっと立派な仕事をする人もあるけれど、多くの人たちは、<我々の子供のために>、あるいは<この子供が父親の私の背を見て立派に育つように>と念じながら、生きていくわけです。そう考えると、非常に情緒的な物言いだけれども、遺伝的に繋がった家族の絆がないと、社会の絆、あるいは宗教の絆、地域の絆、そういったものだけでは50人規模のまとまりもできないのではないのでしょうか。

山登 一夫一婦は後発の文化由来だったかもしれないけど、利己的な遺伝子に基づく家族は必要だったし、だからヒトは家族を大事にして、という形で現代まで生きてきたと理解していました。そして、つい最近になって、各個人、家族の各メンバーが独立に、ひとりでも生きていけるような時代になってきた。その意味ではハッピーのはずです。だから血の繋がった家族は必要ないのかもしれないけれど、家族が崩壊した場合に、その人たちは不幸せだというふうに感じないかなと私は心配するのですが。

増保 社会が経済的に豊かになったから、親子で一生懸命支え合う必要はなくなった。だから、祖父母、両親、子供という三世代が何とか支え合わないと生きられなかったという時代が、もうなくなったのですよ。お爺さんもお婆さんも年金で暮らせるし。それから、子供も若いうちからフリーターをやっても生きていける。そういう時代になったから、家族が少なくとも経済的に結びついていく必要はなくなってしまった。

ホモ・サピエンスが生まれてからずっとこの方、一夫一婦型でやってきて、家族の絆も強かった。それで、情緒も思考もすべてその基盤から築かれてきた。ほぼ40万年経っているわけですね。それで、遅くみても1万年前までは、ホモ・サピエンスの寿命というのは30歳までだったそうです。30歳と短いと、子供と親という二世帯しか存在しない。お爺さんやお婆さんの豊かな知識や知恵が活きない。寿命が30歳を超えるようになって、初めてホモ・サピエンスの知恵とか、その文明・文化あるいは文字が生まれたようです。この100年ほど前までは、人間の寿命はたかだか50歳ほどだったわけです。それが、いま一挙に、日本の平均寿命は80歳あるいはそれ以上になりました。主に、薬を含めた医療の進歩によるものです。繰り返しますが、お年寄りの知恵を活かせるようになって初めて、人類は一

気に文明・文化を発展させることができるようになったわけです。その意味では、一昔前までは血の繋がりがある家族は人類の発展にとって必要不可欠のものだったのです。ところが、最近では、子供は社会が育てるという考えが普及したお陰で、家族の中での長老は必要なくなり、社会システムの中での教育が代替するようになってきたのです。だから、一夫一婦も、遺伝子を共有する家族も必要なくなり、ヒトの幸せにとっては、価値観を共にする夫婦と子どもたちから構成される“いわゆる家族”が有りさえすればいいのかもしれませんが。一夫一婦型はある程度続いていくでしょうが、婚外婚がふえるというのは明らかでしょう。婚外婚がふえると、夫の遺伝子が果たしてその子供に伝わっているかどうか分からない。アメリカでは婚外婚で生まれる子供（婚外子）が25%だそうです。フランスでは先日の新聞で50%にもなっているとか。鳥も一夫一婦型ですが、やはり婚外子のひなが25%ぐらい。今の若い人たちの言動を観察していると、もう遅かれ早かれこの値はもっと上がっていきますね。50%を超えたら、果たして夫は生まれてきた子供を自分の子供として認知できるかどうか。

山登 確かに、今や家族じゃなくて一人ひとりが自由に独立して生きていけますね。すると、その方がそれぞれ幸せに感じるというふうになるのかもしれない。そうすると、ドーキンスのいう利己的な遺伝子からは、遺伝的に近い者に親しみを感じると考えられるのに、ヒトの場合は血縁の家族でもないその50人規模程度の仲間（“いわゆる家族”）という数字や概念が出てくるのはどうしてでしょうか。

増保 基本的には、こういうことでしょう。チンパンジーは50匹規模の集団で採集生活をしていました。だから認識能力も50匹規模だった。ヒトが進化したとき、協力欲が本性として組み込まれたのですが、その認識できる範囲もチンパンジーの能力そのまま50人規模だったのでしょうか。だから、血族でなくても50人規模の帰属集団に貢献できることで喜びを感じた。血族は利己的な遺伝子という観点からは近い存在ですので理想的かも知れませんが、ヒトの場合、文化・文明の発展で、山登さんの言う核酸仲間という、より広い仲間意識に止揚されつつあるのかもしれませんが。だって、山登さんがよくおっしゃるように、私たちは同じ宇宙からの核酸に由来する生物なのだし、少なくとも人類は、最近の教育の普及のお陰で、皆ホモ・サピエンスとして同胞と捉えられるようになったのです。実に究極の博愛主義とも言えるのでしょうね。

やはり共感というものが、本当により大きな喜びに繋がるはずです。少なくとも、ヒトはそういう共感によってより大きな喜びを感じるようにできている。そして共感できる範囲は、どうしても50人なのでしょう。例えば、軍隊などにおける小単位がやはり50人規模らしい。学校の1クラスも最大50人ですね。そのグループリーダーが把握できる人数は50人というわけで、50人が適切のようです。

山登 じゃあ、認識できる制限の数50人は、いくら社会が進歩したとしても消えていかない可能性は高い。一夫一婦は消え、家族も消えるかもしれませんが。

増保 遺伝子で結びついた家族が消えることを私が良しとしているわけではありません。ただ、社会の変化を観察するに、きれいな言葉ではないけれど、婚外婚がふえるということですね。でも、“いわゆる家族”というスタイルはそう簡単になくならない。といってもですね、やはり私が気になるのは、私が小さいときの、家族だけじゃなく、近所の何軒かの家とのつき合い。これは今、全くないですね、ほんとに。家族のだれかが急病だという

と、知り合いの家から看病に跳んでくるし、逆に向こうのうちの息子が病気だと聞けば、跳んで行って徹夜で看病する。あんなことはもうないですね。少なくとも都会では。これは本当に人間にとって幸せなことかどうか（「第3章 協力欲」参照）。

なぜそんなことを言うかという、我々家族がボストンにいたときに、通りを隔てた反対側にアイルランド系の人たちが住んでいました。あの人たちは家族の絆が強いですね。同じ町に従兄弟だとか、隣に弟だとかが住んでいるのです。それで、何か特別な祝日があると、その人たちはみんな親戚の家に寄り集まる。日本ではあのような絆がなくなってしまったと改めて気付きました。

山登 それぞれの国の生い立ちというか、歴史によりませんか。アイルランドってイギリスというかグレートブリテンにかなり押さえつけられてきた。そういう意味では、外圧があったからこそ、自分たちの仲間を大事にするというのか、絆を強めない限り、地球上から葬り去られたのかもしれない。日本は島国一国で、平和に暮らしてきたんですよ。

増保 そうですね。そういう意味で言うと、60年間平和で、平和過ぎて家族の絆も地域の絆も薄くなってしまっているのですよ。豊かになり、選択肢が増えたせいで、昔のような一夫一婦や家族でいなければならない必然性は減少しました。自由度の増大という意味で、幸せになったのかもしれないけれど、逆に個人が独立し、孤独になったために、ヒトの本性である協力欲を満たすべき50人規模の帰属集団さえ見失った不幸せな状態なのじゃないですか。

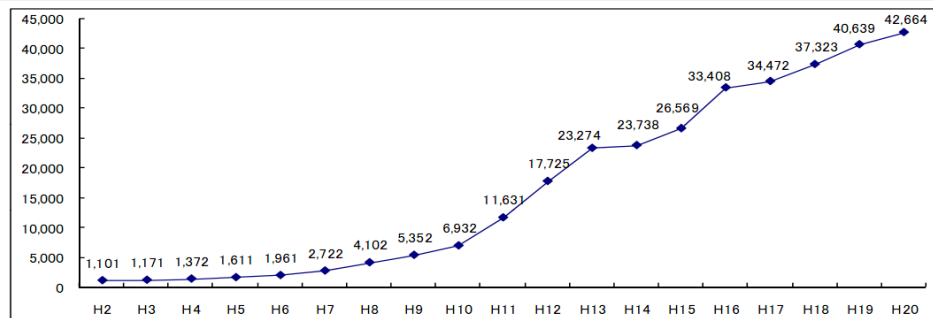
<現代の50人規模の“いわゆる家族”の絆に対する阻害要因>

山登 今の世の中は、ホモ・サピエンスの本性としての協調する喜びと、自由競争社会で自分が競争して相手を負かして自分が勝つ、勝つと世間で評価されますから、その勝つという欲求とがせめぎ合っています。だからこそ現代人は不幸せに感じるところが多いのだと思います。だけど現代の世間の評価に従えば、例えばビル・ゲイツみたいに金持ちになればいいと評価しています。その評価に対して私たちはそうなりたいと思いますよね。そして、その方針を貫けば、協調なんて捨ててしまえ、自分の心の中の協力欲なんて捨ててしまえと思いたいときもありますよ。

すると当然50人規模への帰属意識（昔はそれが家族、血族が主だったのです）すら疎外されて、各個人がお互いに不特定多数として競争社会の中で孤立してしまい、ある意味誰もが敵だという状況になっているのでしょう。そんな現代だから、家族を含め、どんな50人規模の集団に対しても帰属意識が弱くなり、絆が消えていると見受けられます。だから、今や各個人は心の中にストレスを抱え、不安な一生を送らざるを得なくなっているのかもしれない。このために、子供の虐待や、親殺し、孤独死などが増えているのだと理解しています（図1）。このことは、後の「第8章 人々の不満と不安」で詳しく論じようと思います。今の日本の社会システムだと、“いわゆる家族”ですら解体する方向が優勢だということになっていると憂えています。つまり本当にグローバルな自由競争社会（特に制限環境下の）が、人々のストレスや不安の根本的な原因なのだと思います。

児童虐待相談の対応件数及び虐待による死亡事例件数の推移

○ 全国の児童相談所における児童虐待に関する相談件数は、児童虐待防止法施行前の平成11年度に比べ、平成20年度においては3.7倍に増加。



○ 児童虐待によって子どもが死亡した件数(心中以外)は、おおむね年間50件程度で推移。

	第1次報告 (H15.7.1~H15.12.31)			第2次報告 (H16.1.1~H16.12.31)			第3次報告 (H17.1.1~H17.12.31)			第4次報告 (H18.1.1~H18.12.31)			第5次報告 (H19.1.1~H20.3.31)		
	心中以外	心中	計	心中以外	心中	計	心中以外	心中	計	心中以外	心中	計	心中以外	心中	計
例数	24	—	24	48	5	53	51	19	70	52	48	100	73	42	115
人数	25	—	25	50	8	58	56	30	86	61	65	126	78	64	142

※ 第1次報告から第5次報告までの子ども虐待による死亡事例等の検証結果報告より

厚生労働省雇用均等・児童家庭局資料より

図1. 児童虐待の事例数も最近大きく増加している。(厚生労働省 報道資料より)

増保 それは基本的に家族を見直し、その家族を見直すためには地域を見直すというようなことになるのだと思います。地域が全く絆を失っているでしょ。

山登 でも今や、別に地域がまとまらなければいけないような状況もなくなりました。それは幸せなことだと思います。昔、戦国時代は三河と尾張ですらすぐ隣の地域なのに敵同士で攻められ、家族もろとも一族皆殺しにされました。そういう状況だったら当然地域でまとまりますよ。アイルランドの社会・家族と同じですね。だけど今は日本って平和だし、地域としてまとまらなければいけないような状況って少ないですよ。家族としてまとまらなきゃいけない状況も少ない。昔は皆が協力しなければ生きていけない状況だったのに、最近は一人孤独にでも安全に生きていけるほどの豊かな社会になりました。このこと自体とても幸せなことだと思います。このような豊かな状況は活かしながら、だけど家族や50人規模の集団も大事にできるようなシステムをどうやったらつくれるか。この本の中で提案できたらいいのですが。

<クローン、現代生命科学>

増保 話が飛躍しますが、将来、精子が凍結・保存されていれば幾らでも受精はできるようになるでしょう。そうすると、どんな親であったかも知らない子供たちがたくさんできますね。また、イタリアの産科医がクローン赤ちゃんをつくったという報道もありました。あれはうそだったようですが、クローン赤ちゃんが今、技術的に出来ないのかと言えば、出来ないわけではないでしょう。2012年に山中伸弥先生がiPS細胞作製研究でノーベル医学生理学賞を受賞されました。その少し前には、iPS細胞を用いた卵や精子の作製成功についても伝えられました。本当に孫悟空のように毛をふっと吹くと、自分のクローンがたくさん生まれるという時代になるのかもしれない。

山登 そうすると、ドーキンスの“利己的遺伝子”に従って、クローンをいっぱい作っ

ちやいますね。そんな社会になって、ほんとにいい？そんな社会で、人間として生きていきます？

増保 でも、自分の遺伝子がすばらしいと信じ、妻もすばらしい遺伝子を持っていると信じる人が、二人のゲノムを用いて、クレオパトラとシーザー並の子供しか育てないという人も出てきてしまうかもしれない。そうなったら、世界中がクローン人間になっていきますよね。さらに、そこに遺伝子の改変を加えて、我々夫婦よりももっとすばらしい子供が次世代に現れるように、ということが行われてしまうかもしれない。

山登 そんな社会が来てほしい？というのか、来るかもしれない私も恐れますけれども、来ますかね？ただ、先の「第2章 性欲」の話から判断して、多様性の喪失に繋がり、絶滅の危機を招きかねないという意味で、人類はその方向に行かないことを祈ります。但し、制限環境下の利己的戦略に従えば、その方が有利だし、今後増加するかもしれない。でもそうなったら、結局前章の協調性の中の議論を基にすれば、人々は不幸せ感を増大させ、かつその集団（人類）は衰退しないと予想できますが。

<将来像>

増保 婚外子のみならず、クローン人間などが可能となっても、育ての親との絆があるでしょうから、“いわゆる家族”の絆はやはり残りますよね。アメリカでは、実際に、多くの人たちが赤ちゃんを里親として育てていますね。

山登 あれも多分、人間として自分の直接的な遺伝子の子孫じゃないけれど、ヒトとしての同種の遺伝子を保護する、育てる、次の時代につないでいくという意識なんですよ、きっと。彼らの方が、究極の博愛主義を何の苦もなく実践していることになっていますね。その辺は、日本人の感覚とアメリカ人の感覚とやはり違うようです。

増保 ボストンにいたときには、近所のおばあさんが、「クリスマスプレゼントです」って、うちの一番下の子にジャムの詰め合わせを持ってきてくれました。面識のない方でした。「実は私たち夫婦で朝鮮から来た赤ちゃんを育て、その子は成人して出ていったのです。ここのうちの小さな子がハイと手をあげるのを見て、昔を思い出したんです」なんて言われて、ああ、こういう心の温かい人たちがいるんだなと思いましたね。アメリカ人って、そういう感覚なんです。だから将来、世界中が人種とか宗教にとらわれずに……。

山登 なるのでしょうか。それはなってほしいですけど。おまけに、遺伝子の近い家族じゃなく、人類としてのヒトの仲間であるという意識の家族、そういう感覚になればいいのですよね、アメリカ人みたいに。

増保 わが家なんか子供が4人いて生活がアップアップでしたから、余裕なく過ごしてしまったのですが、逆に子供がいなかったら、私は研究にもそんなに専念しなかったかもしれない。子供が力をくれたような気さえますね。それがもし自分の遺伝子を半分受け継いでいなかったら、専念しなかったか。案外、専念したんじゃないかな。里子でも、そういう気になるかもしれない。赤ん坊の、あの可愛らしさというのは、また只者じゃない。それをやはり感性が受けとめてしまう。自分たち人間の子供なんだというふうに取り取ってしまう。

山登 そうですね、確かに。そうしたら、やはり将来は、キブツじゃないけれども、社

会が子供を育てるといふふうになりますか。

増保 えっ。でも、社会によるのだけでも、人種とか宗教が本当になくなりますか。

山登 それはなくならないけど。でもある意味、ヒトの子という意味では人種の差という意識は減ってきますよ。社会が育てる。けど、社会が育てるべきだという話の社会と
いった場合には、すごく多人数を育てている。キブツでは100人規模で育てるのですか。
それよりは、やはり里子でも自分の子供であり、自分の子や親は大事にしますという感覚
で、育てる子供が少人数ならば、“いわゆる家族”の絆は昔と同じようにできる。100人と
いった規模で社会が育てるといふような言い方をすれば、“家族”の絆なんて消えていくか
もしれない。

増保 100人いる子供に対して、自分の子供っていう感覚を持つのはかなり難しい。薄
まってしまいます。だから、どうしても“いわゆる家族”の絆という言い方をすれば、最
大限10名じゃないですかね。10人も子供がいたら大変だけど(笑)。

山登 そうですね。4~5人ぐらいまでだったら、本当の意味での家族の絆というのを保
ったままで“家族”を構成できる。その場合には、ドーキンスの言うような“利己的な遺
伝子”にとられるわけじゃなく、ヒトとしての同種の遺伝子というような考え方がその
うちできますかね。そうしたらすばらしいけどな。

増保 50人というのは必要なはっきりした単位だと思うけれど、その内側に家族という
小単位がやはりあって欲しいという気がしますね。50人を一遍に把握するというのはやは
りできないから、囲碁じゃないけれど、この辺の島を一つしっかりと物にしたい、あの辺
の島もしっかり物にしたい。そういう形で、全体として50人の規模がまとまる。そう見て
いくと、家庭というものは、そうおいそれとなくなるものではないのではないかな。例えば、
子供は遺伝子を共有しているけれど、夫婦はどういうつながりになるのだろう、家族の中
で。親と子供の関係は、よくわかりますよね。でも、パートナーは要らない？

山登 最初に言いましたが、遺伝的には赤の他人だから。だって、浮気も増えるだろ
うし、婚外子も増えるだろ、配偶者って取っかえ引っかえになってきたりしません？(笑)
それはやはり固定したほうがいいですか？今の雰囲気であれば、安心だけど(笑)。

増保 それは個人的な好みで言うことはできるけれども、生物学的にどうでしょうかね。
生物学的に言うと、やはりホモ・サピエンスは一夫一婦だと安心じゃないかな。そう簡単
には変わらないでしょう。前に言ってきたことと反対のことを言うようだけれど、経済的
には必要なくて、精神的には必要でしょう。生きていく上でのパートナーって必要じゃ
ないかね。山登さんと親しく話しても生活のパートナーとはなり得ない。

山登 それは、パートナーというのは女と男であって、取っかえ引っかえでも構わない
わけじゃないんだ。

増保 確かに、この人じゃないと私の仕事は理解してくれないし、この人でないと私の
思考回路もわかってくれない。そんなパートナーが必要なんじゃないかしら。

山登 理想かもしれないけれど、それは配偶者に求めるよりは、ほんとに50人規模の中
の親しい仲間を求めるしかしようがないような気はしますけど(笑)。

で、増保さんの結論であれば、一夫一婦型はそのうちなくなる可能性がある。あつたほ
うがいいけれども。家族の絆に関しても、家族というのは崩壊する方向に行く可能性が高
い。当然、家族があつたほうがいいけれど。ただし、そういう帰属集団が50人規模という

のは絶対に崩れない。生物として生まれたヒトの本性として 50 人規模は必須の要件として、50 人規模の中で共感を得るような生活をする限り、その人は幸せを感じ、生きがいを感じる。だからそれは譲れないけれども、その 50 人規模を強化する意味では家族があったほうがいい。一夫一婦もあったほうがいい。その辺が結論じゃないですかね。

増保 いずれにしても、“利己的な遺伝子”を持つヒトの誕生以来の本性として、親・子・孫といった血族を基盤とする家族は、幸せ、喜びの土台だと思えます。にもかかわらず、その維持の必然性は減少し、現代では一人でも生きていけるため、家族の絆の崩壊や先の項目で話した性行動（子を産まない性の喜び）が顕著になってきました。それは、選択肢（自由度）が増したおかげであり、そのこと自体は望ましいことなのでしょうが、逆に本来のヒトの幸せから逸脱してしまうように感じるのは、多分自由競争を建前とした現代社会体制に由来する各個人の心の軋轢や葛藤によるストレスのためと考えられます。そのことは、「第 8 章 人々の不満と不安」の項目のところで、触れたいと思います。そして、現代地球の制限環境下の自由競争社会では難しいと考えられるのですが、個々人が孤立しないで、協力欲を満たせる 50 人規模の集団に帰属し、幸せに暮らせる社会組織体制を、この対談の中で模索して提案しようと願っています（結語参照）。

話は逸れるけど、人間改造に対して、現在の世界では非常に否定的だし、各国が禁止していますよね。例えば人間を遺伝子変換してしまうということに対して、法律上禁止しています。でも果たして、これが大きな戦争、世界レベルでの戦争でも起こったら、勝つためにはそんなルールはなくなってしまう可能性もあるのではないですか。例えば、あのキューバ危機なんていうのは、どうだったのでしょうか。

山登 ああ、危なかったですね。だけど、今の制度ってすごく行き詰まっているところがある。昔は、60 年、70 年単位に戦争が起こったから、その制度で行き詰まってきて弊害ばかり出てきたら、戦争をして一新して、チャラにしてしまう。それで戦争の後、また新しくスタートするから活力が生まれて、新たな時代が生まれてきた。そういうふうに言われていたと思いますよ。だけど今後、戦争は少ない、あるいは無くなると思います。世界的に、第一次世界大戦、第二次世界大戦のような形で、世界的な社会体制、制度をチャラにして変えるというような戦争は難しいですよ。そうすると、いま行き詰まりつつあるような金融制度も含めて、これはなかなかチャラにできない。次の 50 年とか 20 年を生きていくためにどういう改革が必要ですかね。改革の方法だって、すごく難しいですけどね。それが、折に触れて話に出た、自給自足体制の確立でしょうかしら。